

2030 SDGsで変える



稲田義久
甲南大教授

イベントの狙いは何なのか。甲南大学総合研究所長の稲田義久教授(計量経済学)に聞いた。

「SDGs」(Sustainable Development Goals)は、国連加盟国が2030年までに取り組む持

相乗効果で思わぬアイデア

持続可能な開発目標です。すべての人が平和と豊かさを享受できるように取り組む17の目標が掲げられています。SDGsにかかわる地域の課題を、甲南大生と、大学と包括連携協定を結ぶ4市の高校生が、共同で調査・研究するのが「関西湾岸SDGsチャレンジ」です。

フィールドワークを重ねて、市民に話を聞き、高校生の地元の視点に、学生の発想を掛け合わせてアイデアを出し合います。成果発表では思いも寄らぬアイデアを生み出す相乗効果を感じました。例えば、緑道という地元資源に着目した発想が面白い。電動カートのシェアで高齢者の公共交通を確保する提案は、実現可能性を秘めていました。

◇この特集は嘉幡久敬、田中章博、波多野陽、金本有加が担当しました。

学生×地元生徒 探る未来



関西湾岸SDGsチャレンジに参加した学生ら

和歌山市のチームは大学生5人と市立和歌山高校の3人の計8人。「交通手段を改善して住みやすい町を作る」をテーマに選んだ。甲南大共通教育センターの岡村こず恵特任准教授のもと、特に高齢者向けの交通について、市役所

和歌山市

や地域のバス運営協議会、町づくりの団体などに取材し、二つの解決策を提案した。

一つは「電動カート」の利用だ。徒歩より少し早いぐらいの速度で動く4輪式の1人乗りで、主に高齢者向けに普及している。免許は不要だ。

バスの本数は少なく、駅まで遠いといった不便さの解消を目指し、カーシェアリングのように地域住民が電動カーを共同利用できないかと考えた。最寄りのコンビニや公共施設にプールし、月6千円程度の利用料で乗り捨ててもできるようにする。市内で最も高齢化が進む地区をモデルに試算したところ、一定数の利用者がいれば黒字運営できるとした。

二つ目の提案はバス停の改善だ。過去の市の調査報告書を調べ、ベンチや屋根の設置を要望する声が多いことに気づいた。屋根やベンチの具体的なデザイン案も示し、高齢者に「見やすい運賃表や、時刻早見表」なども考案した。

チームリーダーを務めた経済学部2年の南野慎之介さん(19)は「自分たちで考えたアイデアを提案できたのはよかった。アイデアは出すだけでなく、調査とデータ収集をもとに有効性を検証することの大切さを学んだ」と話した。

関西湾岸SDGsチャレンジの流れ

- 8月5日 甲南大生と高校生がチームを結成。4都市で解決する課題を決める
- 8月下旬 4チームが現地を調査
- 8～9月 調査結果を元に4都市の課題の解決策を考える
- 9月23日 解決策をプレゼンテーションで発表

4チームが挑んだ課題と解決策

- 1 解決しようとした課題
- 2 チームが行った調査の内容
- 3 それぞれの自治体への提案

- 1 定住外国人との多文化共生
- 2 市や支援団体、インターナショナルスクールへの取材
- 3 教員研修の充実やボランティアの優遇策、公設民営の国際学校の新設

- 1 伝統の「藍」の保存と活性化
- 2 藍染めの業者や市などに聞き取り
- 3 企画展や藍染め体験ツアー、畑の貸し出し

- 1 人口減少や高齢化が進む泉北ニュータウンの再生
- 2 市民団体や行政へのヒアリングと現地調査
- 3 ニュータウン内の「緑道」を、市民の手で花で彩る

- 1 交通手段を改善した住みやすい街作り
- 2 市やバス運営団体、市民にヒアリング
- 3 電動カートのシェアとバス停の改善

外国人の子も夢描くまちへ

神戸市

SDGsの標語「誰ひとり取り残さない」を掲げ、神戸市を定住外国人が過ごしやすい都市にしようと考えたのは、大学生5人と甲南高校の4人だ。

日本語の学習支援ボランティア経験のある高校生のアイデアから、外国人児童に焦点を当てた。甲南高2年の木島亮さん(16)は「学校で独りになる」「周りに話しかけられない」という子どもの声が気になっていた。ボランティア先のNPO法人を改めてチームで取材。「夢や可能性を最大限に広げたい」との理念を心に留めた。木島さんは「誰もが受け入れられる『多文化共生社会』になってほしい」と望んでいる。

解決策として示したのは、子どものSOSに気づける教員の育成だ。外国人児童の進学率を上げるため、入試制度や将来の選択肢についてアドバイスできる若者がボランティアしやすくなる仕組みや、公設民営の学校などをつくって通える学校の選



神戸市の課題解決案について発表する参加者

択肢を広げることも提案した。

23年前の阪神大震災で、市内の外国人被災者が避難情報から取り残されたと知った法学部3年の三浦麻由さん(20)は台風21号が襲来した際、「外国の人は安全に避難できているか、と違う立場の人の見方で考えられるようになった」。

指導した甲南大の久保はるか教授(行政学)はグローバルな課題を地域で、地域の課題をグローバルに考える重要性を指摘。「色々な立場がある難しいテーマも、SDGsの指針で望ましい姿が見えてきた」



調査に訪れた企業で藍染めを体験する徳島チームの学生ら
＝2018年8月22日、徳島市、成田直茂氏撮影

提案したのは、藍の魅力を発信する博物館などでの企画展や藍を育てる段階からの藍染めの体験ツアー、畑の貸し出しというアイデア。いずれも「体験」に重きを置いて、木材を染めたり、洋菓子に混ぜたりと使い道も多彩な藍の魅力を伝える提案だ。同高3年の藤城三瑚さん(18)は「地元についても知らなかったことを今回は多く学べた。藍は徳島にとって大切だし、残していきたい」と語った。

実際に工房でハンカチを染めてみた。茶色だった木綿から染める度に美しい青みが現れるのを目の当たりにした。チームリーダーをした法学部3年の内間理紗さん(21)は「化学染料には出せない自然な風合いなどがよく分かった」。

指導役の甲南大マネジメント創造学部の倉本宜史准教授と8月下旬に徳島市で調査をした。藍染めなどの業者や市、大学などに課題を聞き取ると、「藍の良さを伝える機会が不足」「消費者のニーズが分からない」などの声があがった。

徳島市

人口減で地方の多様な文化が失われるのを食い止めようという議論をしていたチームは、高校生が紹介した藍について調べることにした。

徳島市チームは「持続可能な産業」として地元で伝わる「藍染め」に注目。大学生4人と徳島市立高校の生徒3人が、藍の文化をどう守り、活性化させていくかを考えた。「水都」をうたう徳島市には四国一の大河・吉野川が流れ込む。肥沃な地で藍の栽培が江戸時代に隆盛となり、藍倉も並ぶ。

徳島市

人口減で地方の多様な文化が失われるのを食い止めようという議論をしていたチームは、高校生が紹介した藍について調べることにした。

市立堺高校4人と大学生5人の堺市のチームは、住民の減少と高齢化を抱える泉北ニュータウンの再生をテーマにした。甲南大経営学部の渡邊和俊教授と、藤田順也准教授の元で取り組んだ。

堺市

間として四季の花で彩る。緑道を実際に歩いて発案した法学部3年の井藤七美さん(21)は「豊かな緑に花は色を添える。まちのイメージを変えられると思った」。

大阪市の南隣にあたる堺市の泉北ニュータウンは、西日本最大規模で50年の歴史がある。生徒と学生らは、市役所やまちづくりの市民団体を取材。子育て世代の転入を促そうと着目したのが、ニュータウン内を計24キロわたつてめぐられた歩行者専用の「緑道」だ。駅を中心に、住宅街の中で散歩やジョギング、ハイキングができる。提案したのは、住民自身によるガーデニングで「緑道を花で囲む」というアイデアだ。自然に親しみながら子育てできる住空間として四季の花で彩る。緑道を実際に歩いて発案した法学部3年の井藤七美さん(21)は「豊かな緑に花は色を添える。まちのイメージを変えられると思った」。

集合住宅に住む人もガーデニングを楽しむ。幅広い世代の住民が顔を合わせながらまちづくりに参加し、コミュニティの質を高められると考えた。種は古紙回収費などをあてて。

市民が日常的に楽しみ、今あるものを生かす取り組みを意識したのは、持続可能な取り組みするため。取材で市民団体から考え方を学んだという。

同高2年の桃崎祐成さん(16)は「現場を歩き、人に話を聞くことで、親しみをもってわがごとくして考えられた」と話した。

伝統の「藍」体験で魅力伝える

「緑道」からニュータウンの明日